

## 別記様式第6

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	胡 逸蝶
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 芥川文学における帝国主義批判の再検討—その思想の展開と特徴をめぐって—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		教授	溝渕 園子
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		教授	高永 茂
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		教授	有元 伸子
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		准教授	M-N. ボーヴィウ
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		教育学研究科・教授	西原 大輔
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、芥川龍之介の帝国主義批判の思想と創作手法について、各々の深化の過程及び特徴を明らかにすることを目的とするものである。近代中国を舞台にした諸作品の分析と諸要素の関連づけを行いながら、芥川の歴史認識や日本の近代作家としての主体性の問題を再検討し、人間の生や芸術をめぐる理念の変化を明らかにしている。本論文は、序論と終章を含む全8章から構成される。</p> <p>序章では、研究の背景、先行研究、課題の設定及び研究の目的について述べる。帝国主義や植民地主義などの鍵概念の説明も行う。</p> <p>第2章では、「首が落ちた話」が当時のマスメディアによる日清戦争の宣伝に着想を得たものであると指摘する。日本兵と中国兵との同一性を強調する語りから、敵/味方の差異や、帝国主義戦争における侵略する側/される側の差異が無化されていることを示し、芥川の平和主義思想の萌芽と帝国主義に対する批評性について論じる。</p> <p>第3章では、〈梅毒〉の流行を帝国主義の拡張と関連づけた上で、「南京の基督」におけるこの病の象徴的意味を論じる。〈梅毒〉の感染や混血児の表象が、西洋の植民地政策とは異なる新たな支配の可能性を示す触媒となり得ることを読み解くとともに、そこに植民地主義に対する芥川の批判の限界を見る。</p> <p>第4章では、「奇怪な再会」を対象として、西洋の近代文明と中国の古典文化に対する日本の知識層の見方を検討する。作品舞台の日清戦争前後と作品執筆時の1920年代という時間差に着目し、それは中国蔑視から古典文化の再評価へと転じた時代状況が反映されたものだと述べる。日本人男性が中国人女性を日本に連れ帰るといった物語は、戦争による中国の伝統文化破壊と侵略による文化占有の破綻とを意味すると論じる。</p> <p>第5章では、「将軍」における日本人と中国人との対立の図式が、作者の中国視察旅行での経験から得られた、両者の確執への再認識を映し出したものであると指摘する。戦場で人間性を殺し帝国軍人と化す一兵卒と、帝国主義言説の思想や文化を象徴するN将軍との対比的構図から、芥川の批判の</p>			

手法を読み取る。

第6章では、ニーチェの〈超人〉に対する芥川の懐疑と畏怖の心情を重視しつつ、評論「僻見」を帝国日本の植民地拡張と関連づけて解釈する。民衆に神格化され、理想化された国家の権力者としての岩見重太郎という〈超人〉的形象と、〈超人〉に追随しようとする「我々」という群像との関係が、植民地主義の原動力の陰画となり得ることを述べる。

第7章では、「桃太郎」について、当時流通していた一般的な桃太郎像と比較した上で、作者の技法と意図を考察する。鬼の立場から桃太郎の鬼ヶ島征伐が語られるという視点の反転は、関東大震災の朝鮮人虐殺事件に着想を得たものであると主張する。すべての登場人物の間で生じる矛盾を外部の鬼が島に転嫁するという設定には、戦争と結びつく隠喩が意図されていると論じる。

終章では、論文全体を総括した上で残された課題を挙げ、今後の研究の展望を述べる。

本論文は、同時代の文学空間の文脈に各作品を置いて、作家個人の思想の深化とそれを表現する創作技法の変化とを丁寧に関連づけることにより、芥川文学における帝国主義批判が、種々の矛盾と交錯を引き受けつつ、複層的に絡み合うようにして展開した様相を浮き彫りにしている。作家への評価のあり方や宗教の扱い方などに課題が残るものの、従来の研究を前進させる優れた作品論で構成されており、また芥川の帝国主義批判の全体像を捉えようとした意欲的な作家論として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)